書評と紹介

辻　智子著

『繊維女性労働者の生活記録運動

――一九五〇年代サークル運動と若者たちの自己形成』

評者：松田　忍

東亜紡織泊工場で働く女性労働者たちが1950年代初頭に取り組みはじめた生活記録運動が展開していくプロセスを丹念に追った研究である。著者も指摘するように，生活記録運動については研究の大きな進展が近年に見られ，教育学の分野からだけではなく，歴史学研究や社会運動・文化運動・文学運動研究の立場からも注目されている。そのなかにあって，著者の主たる問題関心は社会教育の実践事例としての生活記録がもつ可能性にあると思われる。

本書の最大の特徴は，文字が生みだされる場への徹底的な注目がある。著者は「メンバーの属性や相互関係，集団が置かれた文脈やその課題・問題の探求過程など集団内外のミクロな権力関係」を重視して運動を記述すると書いており，その執筆意図が徹頭徹尾貫かれている。

こうした深い分析は，永年にわたる著者の地道な調査を基盤として可能になった。1993年以降，「生活を記録する会」メンバーとの交流を続け現在に至る著者は，文集を中心とする当時の刊行物に加えて，運動に参加した（し続けている）メンバーの日記およびインタビュー資料など豊富な史資料から議論を組み立てている。運動を外部から眺めるだけではなく，運動に飛び込み深い信頼関係を築いてはじめて得ることができたであろう貴重な証言が，本書の随所に見られるだけではなく，1950年代の時代状況を背景に置きながら運動が立ち上がり展開する論理に迫る議論には強い説得力がある。

運動をわきおこすエネルギーの源は，大文字の歴史や政治にではなく，人びとが取り組む生活と労働の実践の現場にこそある。その本質を明らかにした本書の価値は社会教育の研究領域の範囲をすでに超えており，およそ戦後の運動に関わる領域を扱う全ての研究者に読まれるべき書となっている。

この労作を完成させた著者の長期間にわたる研鑽に心から敬意を表したい。

章構成は以下の通りである。

第一章　生活綴方の始まり――一九五二年頃まで
第二章　生活綴方の広がり――一九五二年～五三年頃
第三章　生活綴方の困難――一九五〇年代半ば
第四章　女性労働者の葛藤と模索――一九五〇年代後半～一九六〇年代初頭
第五章　一九六〇年代以降のサークルと仲間たち

以下，各章の内容を見ながら，著者が提示している論点に触れたい。

第一章では泊工場の労文サークルが結成され，女子労働者たちが生活綴方の手法を獲得するまでの時期が描かれている。

1950年1月，澤井余志郎のリードのもと，労組機関紙『わかくさ』誌上で文化サークルの

結成が呼びかけられ，文学・音楽・映画・演劇の4サークルが結成される。しかしながら活動開始後1年ほどが経つと，「労働者と資本家がイガミあったり，反戦平和の旗をふるといった芝居」ばかりになり，学校で習った歌は「気持ちにピッタリこ」ず，さらに文学サークルでは「なにを書いたらわから」ずに，外部からは「この人たちには生活がないのだろうか」と手厳しく批判される状況に陥ったとされる。

そこで彼女たちがであったのが『山びこ学校』であった。当時泊工場で働いていた女子労働者は均質な属性をもっていた。ほぼ全員が長野県上伊那郡・下伊那郡出身であり，また1947年4月からはじまった新しい学校教育を受けた世代でもある。泊工場に新制中学卒業者の就職がはじまったのは1949年であり，のちに「生活を記録する会」に集うことになるメンバーは1949年から1951年に入社した世代に集中している。『山びこ学校』の中学生たち（1950年に中学2年生）とほぼ同世代であり，その境遇に自らの貧しさを重ね合わせていたという。

高校進学がかなわず就職し，「近代的」な工場生活の環境に暮らしながらも，「工場から家への金の流れは厳然と存在し，若年女性を結節点として，農村と繊維産業とは依然強固に結びつい」ている構造のもと，彼女たちが取り組んだのが，「労文山びこ学校」を結成し，自分の家のことや送金のことなどについて話し，書くことであった。

貧しさを話すこと，さらには書くことに対する恥ずかしさ，「女工」ではない女性労働者でありたいとする自己認識，無着成恭・国分一太郎・母校の先生たちに文集を送り，学ぶ自分を知ってもらいたいとする想いが交錯するとともに，サークル外からは生活綴方の活動を「やらしい」と批難する同僚の視線に対して，書く行為を自問自答せざるをえない状況にあったことが丁寧に描かれている。

第二章では，1951年度，1952年度の大量新規採用によって勃発した寮問題をきっかけとして，『私の家』刊行時には冷ややかであった同僚を巻き込み，工場の外の世界ともつながりながら，生活綴方の取り組みが活発化していく時期が分析されている。

さらに生活綴方に熱心に取り組んできたメンバーが泊労組で役職に当選したことで，1953年の労組活動方針に生活綴方が盛りこまれる。初期の文集に生活綴方が掲載された人は泊工場の従業員数の約1割にすぎなかったが，生活綴方の活動が寮問題の解決などを通じて，工場労働者の一定の信頼を得ていたことが背景にあったのではないかと著者は指摘する。

この時期に編まれた文集が『私のお母さん』『母の歴史』であった。「農村の母のような人生を送りたくない」がゆえに，「民主的」「文化的」な近代的女性労働者としての意識を育む手段として，彼女たちは積極的にサークルや労組・寮自治会の活動に参加したのだと指摘されている。

第三章では会社からの批難を浴びることで，運動が困難となった時期が描かれる。1954年を境に，会社側は生活綴方を「アカ」とする批判を展開した。会社は生活綴方にかわって「暮らしの作文」を提唱し，1955年から作文コンクールを開催して表彰した。「暮らしの作文」には，書くことによって生活を直視し，問題を明らかにして解決に向かっていく「生活綴方的に物事に立ち向う」回路は存在しなかった。

生活綴方批判は指導者・澤井余志郎の解雇で明確な形をとる。生活綴方に関わる女性の多くが職場異動を命ぜられ，会社は労働者家族を巻き込んで生活綴方をやめるように説得を続けるなかで，澤井を支持するものの数は減り，残された澤井支持者が「仲間」として生活綴方を続

ける形となり，圧迫への抵抗が書き続けるエネルギーの源となった。

1955年1月に有志サークル「生活を記録する会」が37名の「仲間」によって発足した。工場内外の同志的連帯の構築を志向する生活綴方文集『なかまたち』に加えて，1956年4月からはサークル内の機関誌『書くこと』を刊行するようになり，こうした文集が「孤立しつつあるサークル集団がそのメンバーどうしの結束力を高め一体となるための場としての機能」を発揮したと指摘する。会社からの圧迫はむしろメンバー間の結束を高め，それよりも，メンバー同士の恋愛を生活綴方の運動にいかに位置づけるかをめぐる意見の相違が，運動にとっての危機となったとの指摘は非常に興味深い。

第四章では，女性労働者としては長期の勤務になっていたメンバーが，近代的女性労働者の自己意識と「仲間」たちが結婚していく現実との狭間で，それぞれの進路の方向性が彼女たちの課題となったことが取り上げられている。

1956年7月主要メンバー同士が結婚した際には，「なかまのなかの結婚式」と呼ばれる会費制の「新しい結婚式」がおこなわれた。この形式は新郎新婦の希望ではあったが，それに加えて生活綴方の活動を冷ややかに見ていた人に対して，普通の結婚を見せることはできないとの意地が「仲間」たちのエネルギーとなったことが指摘されている。

1950年代後半には，近代的女子労働者と自負しながらも，やがては「出稼ぎ女工」の如く村へ帰ることが予想される自らの境遇に戸惑う彼女たちの思いを越えて，繊維不況に基づく操短がおこなわれ，「仲間」からも一時帰休指名されるものが相次いだ。労働者数および寮居住者の数も1953年をピークに急激に減った。事実として，「仲間」たちが次々と工場を去って行くなかで，残されたメンバーも「書けなくなる」事態が生じたことが描かれた。

第五章では1960年以降の「生活を記録する会」の展開がしるされている。

退職後も「生活を記録する会」メンバーは「五年目ごとのつどい」を開催し，本書刊行時点で14回目（2008年）まで開催されている。このつどいは単なる同窓会ではなく，書くためのつどいであった。「書く気はあるが書けない」「書いてどうなるものでもない」「書きたくない」の声が大きく，書けないメンバーも多い一方で，つどいが50年もの長期にわたって継続されたのは，「「母の歴史」をくりかえさない」という課題をメンバーが共有したからであり，「書けたか」「書けなかった」の事実そのものが重要だったわけではなく，「書くこととの格闘」自体が彼女たちが「自らの今」とむきあう営みであったと締めくくられている。

以下，本書から得られた論点を何点か指摘する。

1点目は，運動のエネルギーが生じる場の歴史的一回性の問題である。

労組文化サークルからはじまった生活記録の試みが1955年に「生活を記録する会」として結成され，2000年代に至るまで，メンバーの脱落はあっても新規加入の痕跡がほとんど見られないことである。1950年代初頭の朝鮮特需下の好景気のなかで，一時活気にみちあふれた繊維産業において，数年間だけ大量採用された女性労働者たちによるエネルギーが「生活を記録する会」を存続させ続けたのであった。

文集に取り上げられたテーマを順に挙げると，農村からでてきて工場での近代的な生活を送っているにもかかわらず農村に縛られる自らの境遇，その農村で暮らす母の姿，寮生活への不満，生活綴方への会社からの圧力に対する抵抗，恋愛や結婚となり，また彼女たちのライフ

コースに沿って展開しているといえよう。戦後の民主主義教育をうけた女性のライフコースのモデルがなかった時代において，生活を記録することで「母の歴史」を繰り返すまいとした女性たちのコーホート的な理解が本書を通じて可能となる。結婚し母となり，「書けなくなりつつ書こうとした」「書こうとしつつ書けなくなった」1960年代以降の運動の展開が，第五章に描かれている意味も大きいように思う。

北河賢三氏[(1)]の整理によると，戦後の生活記録運動は1951年の『山びこ学校』『新しい綴り方教室』にはじまり，サークル誌の発行に注目すると1950年代後半の「政治情勢と，平和活動や勤評闘争から安保闘争に至る社会運動の高揚の時期に対応して」盛りあがった生活記録運動は，「政治的対立と社会運動の激化」ゆえに「亀裂・分解」が進行したことが指摘されている。生活記録運動を含む「生活」をエネルギーの源泉とする運動を分析する際には，世代や人口動態や人の移動を考慮に入れつつ「生活」を描く必要を本書は強く示している。

2点目は1950年代における「書く」行為が共同性を帯びた実践であったことを明確に指摘している点である。紡織工場と寮の集団生活のなかで書かれる日記は，自分が一人になれる場であったのと同時に，秘められたものではありえなかったと著者は指摘する。なぜならば寮生活では，日記を書く行為自体が周囲の目にさらされたからである。また「本当の友だち」になりたいと思うとき，彼女たちは日記をしばしば友人に見せ，さらに交替番勤務の間の会話の手段として，共同日記や交換日記を多用した。そして誰と誰が日記を交わしているかの事実自体が共有され，意味をもったと指摘される。「みんなが役立つような日記」が目指され，日記は指導者に見せて評価をもらうものでもあった。そして日記の世界が共同性のなかで展開するとき，日記の世界と生活綴方の世界とが連続的につながっていることが理解できた。

さらに話すことと書くことの連続性も本書から指摘できる。書くことは話すことと分離された実践ではありえなかった。それらの行為は連関してつながりつつ，「秘密」を打ちあけて，話すか否か，書くか否か，さらには刊行するか否かのそれぞれの段階で心理的な障壁があった。

1960年代以降の運動が複数のメンバーが近くで生活する伊那を拠点に続けられたことにもそれは示唆されるように，生活記録運動はあくまでも地域や職域など共同性をもつ場で展開する運動であった。その点で「村落共同体や職業的利益あるいは宗教や教育など既成の文化的関心を超えて，日常的生活利益に根ざした消費者運動やベトナム救援，地球環境保全などのモラリティを軸とした新たな人びとのネットワークが，都市社会を中心に広がっていった」[(2)]，後の時代との接合をどう考えるかの問題は残るだろう。

3点目には，新生活運動を研究してきた評者の立場から論じたい。運動を推進する論理に寄り添って内在的に見ていくことで，「生活」の運動が，「生活」の問題や矛盾が存在する場，「生活」の熱意をもつ人びとが集う場で生じ，展開することをクリアに切り取ったのが本書である。そのことによって，新生活運動から分析しているときには見えづらかった，「生活」の場から発せられる（それ自体は政治的・思想的に無色透明の）エネルギーの実像を見ることができた。各章で言及される外部の運動や知識人との関係においては「認められたい」との衝動をもつ一方で，あくまでも戦後民主主義の教育を土台として，「当たり前」のことを「当たり前」として主張することに価値を見いだす彼女たちの姿が印象的であった。

また1950年代の新生活運動は性別を問わずに盛りあがった運動であったものが，1960年頃から一旦落ち込み，今度は1960年代後半から生活学校運動という主婦（女性）たちの運動として盛りあがるが，そうした運動の盛衰を考える際のヒントを本書から得た気がする。「生活」や「労働」の領域のモデル化が進行する高度成長期後半においては、男性においては「生活」のなかでは矛盾が解消される（「生活」の充足＝「生活」のエネルギーが生じにくい）のに対し，「女性」の領域では矛盾が残される。その矛盾を「話そう」「書こう」として生活学校に集った女性たちをコーホート的につかまえてみたい。本書を読んでそのように思わされた。

歴史学を専門とする評者であるがゆえに，論点に対する，著者の力点の置き方を正確に読み取れていない可能性が高い。しかし，そうと分かっていてもなお，書評を執筆したくなる魅力が本書に詰まっていた。至らぬ点についてはどうかご寛恕願いたい。

（辻智子著『繊維女性労働者の生活記録運動――一九五〇年代サークル運動と若者たちの自己形成』北海道大学出版会，2015年11月，ix ＋ 431 ＋ 62頁，定価9,000円＋税）

（まつだ・しのぶ　昭和女子大学人間文化学部准教授）

【参考文献】

(1) 北河賢三『戦後史のなかの生活記録運動――東北農村の青年・女性たち』（岩波書店，2014年）6-11頁。
(2) 高畠通敏「「市民社会」とはなにか――戦後日本の市民社会論」（同編『現代市民政治論』世織書房，2003年）113-114頁。